遼寧省朝陽地区隋唐墓副葬品の調査

遼寧省文物考古研究所との共同研究は、今年度も遼寧省瀋陽市の遼寧省文物考古研究所で、朝陽地区隋唐墓の副葬品を調査しました。ここ数年、秋に調査するのが恒例となっていましたが、今回は6月7日から14日までの8日間、調査とともに共同研究等に関する協議もおこなってきました。調査者は、所外の研究者も含めて計8名でした。

今回の調査対象は遼寧省文物考古研究所などによって朝陽市で発掘調査された、隋韓暨家族墓、繊維廠唐墓、勾龍墓（唐墓）の副葬品です。土器・陶器類、陶俑などを中心に調査を進めました。

調査は、遺物の撮影、熟覧・調書作成、実測、3Dデジタイザによる計測・データ採取など、考古学的調査を実施しました。勾龍墓は1983年に発掘調査がおこなわれた唐墓で、出土した墓誌から唐の高宗咸亨3年（672）という年代が判明しています。この年は日本では天武元年にあたります。今回調査した三彩の「水盂」は、鉢形の灰皿のような器で、2008年3月にも調査していますが、今回改めて細部の観察をおこない製作技法などを確認しました。来年度、調査研究論集の作成に取りかかる予定ですが、そのためにも今後、こうした詳細な再調査が必要になると考えています。

今回はこうした副葬品調査とともに、調査研究論集の編集方針や今後の調査・研究の進め方について協議をおこないました。また飛鳥資料館における秋期特別展の図録作成のために、喇嘛洞墓や馮素弗墓などの遺跡の現況を撮影してきました。秋には中国の研究者の招聘を、来年3月には調査を予定しています。

（企画調整部　小池 伸彦）

馮素弗墓の遠景（中央やや左の擁壁部分）

解説ボランティアの10年

平城宮跡が世界文化遺産に登録された翌1999（平成10）年の10月に、奈良文化財研究所の解説ボランティア事業は開始されました。

当時、平城宮跡を訪れる人から解説を望む声が多く寄せられていたことと同時に、研究所としても調査の成果を広く発信したいという思いから、設置が実現したものです。

当初、ボランティアの人数は50名からのスタートを計画していましたが、募集してみると260名を越える応募があり、驚きながら抽選をおこない、89名の方々を一期生としてお迎えしたのでした。

あれから10年。その後、3回の募集を重ね、現在51歳から80歳まで128名のボランティアが平城宮跡の各施設を中心に活動しています。今では知識も経験もすっかり円熟され、みなさんそれぞれの個性あふれる解説は、平城宮跡を訪れる人たちにとって、なくてはならないものとなっています。

この10年間の活動に敬意を表して、この6月4日には青木文化庁長官（当時）から感謝状が贈呈されました。勤勉なボランティアのみなさんの熱意と、訪れる人々への思いやりに支えられて継続してきた事業を、研究所も大切に発展させていかなければなりません。

さて、11年目となる2010年は、ちょうど平城遷都1300年祭が開催される年に当たり、まさに大きな節目です。「定点ガイド」として参加する1300年祭「平城宮跡探訪ツアー事業」に備え、現在、研修をおこなっているところです。

ますます期待が高まり、忙しくなる解説活動ですが、健康にはくれぐれも注意していただいて、次の活動日も元気に平城宮跡へお越しくださることを願っています。

（管理部　永井 あつ子）

青木長官からの感謝状贈呈式（平城宮跡資料館講堂）